

12月12日の休刊日号外に掲載した「番外天声人語」

これから日本語の世界で感嘆符がより存在感を増すかもしれない。府省庁が発行する広報文や会議録には！を使ってもよい旨、文化庁の文化審議会が方針を改めた。実に70年ぶりのルール変更という▼調べてみると、政府は戦後、官報や議事録を文語調から口語調へ改めている。句読点や括弧記号は公用文での使用が許されたのに、感嘆符は外された。日本語では歴史が浅く、俗用と見なされたようだ▼成蹊大の大橋崇行・准教授（43）によると、日本で感嘆符が盛んに使われ始めたのは1887（明治20）年あたりから。とりわけ若手の人気作家だった山田美妙（びみょう）が駆使した。当時は！に定訳がなく、美妙は「ホコ」と呼んだとか▼大学予備門で学んだ英語から、？や＝――などとともに！を取り入れ、自作の小説で多用する。斬新な文体と刺激的な挿絵で若くして名をなしたが、20代後半、私的な不品行を批判され、文壇に足場を失う。辞書の編纂（へんさん）などで糊口（ここう）をしのぐも、生活は苦しかったらしい▼代表作『蝴蝶（こちょう）』と『いちご姫』を読んでみた。迎え！ 良心！ 思わぬ！ どうしたら！ 擁護擁護！ たしかに感嘆符が多すぎる。しかも打ち方に規則性がなく、物語のヤマ場では乱れ打ちも。読みながらやや目に疲れを覚えた▼そんな美妙にも節度はあった。1マスに打つのは1個まで。手もとの小説に！！は見られない。若き作家が感嘆符を広めて約135年。もしいま、わがスマホの画面を飛び交う！の山を見たらいかに驚くことか！！

◇

休刊日に合わせて月1回、「番外天声人語」をお届けします。今回の筆者は山中季広・論説主幹です。